

論民談

22211148 小林寿稀也

金座の後藤庄三郎（しょうざぶろう）、呉服所の後藤縫殿助（ぬいどのすけ）は町人でありながら格式を授けられたために義務があり、旒（りゅう）・出火（しゅっか）・帯刀（たいとう）・熨斗目（のしめ）着用などと決まっているため町人らしいところはなく、大名と同じである。居間にいて側近の家来を使い、外出時は乗り物。玄関番があり、門には門番、馬屋には馬、長屋には家来がいる。これらすべては大名のふるまいであり、町人らしいところがないため、両家とも貧しい状況にある。江戸において町人に格式を下されるのは、全国を統一している幕府としての計策であり、金銀が固定しないようにしたものである。他領の金が自分の領内へ流れ込むためには町人に格式を与えるのは悪いことである。大名は何の理由もなく江戸に似せようとし、間違いが多々ある。江戸において町人に格式を下すことは上手な計策であるが、大名が町人に格式を与えるのはよくない。江戸はなまける風潮があるため、財産を増やすことは厳しい。大阪の町人は格式がまったくない。出入りの大名屋敷から格式を与えられても、それをまったく問題にしない。鴻池（こうのいけ）の善右衛門（ぜんうえもん）は大阪第一の富豪である。雨の日でも駕籠（かご）にのらず、一人の下僕だけを連れて、高下駄をはき、商用に出歩く。このようにして金銀が流れ込んでくる。大阪は人柄をかえりみず、気軽に働いて財産を増やす。町人の在り方は、台所を居間とし、店の次を帳簿箱の置き場所としてここに主人がすわる。飯の時は使用人と同じ場所で飯を食べ、副食物も使用人と同じ惣菜である。これはどの世帯であっても、この通りになる。格式を与えられれば多少尊大に振舞わねばならないため、飯の時は台所の次の間で使用人とは別に食事をする。また格式が上がると、帳簿箱から離れて手代に帳簿箱を任すことになり、家政はたちまち悪くなる。多銭善售（たせんよくうる）という言葉があり、資力があるものは商売が盛んになるという意味。簡単に表すと、金が金を呼ぶというものである。城下に金持があると他領の金は自領へ流れ込む。城下に金持がないと、自領の金は他領へ流れ出る道理である。そのため江戸の政治を城下へ移す時には、公私の分をあきらかにして、内外の関係や量の大小を全部揃えて考慮して利益か不利益かをいうべきである。大阪の船場に幕府からの御用金の仰せを受け、御買米（おかいまい）の役をつとめているほどの位置にある町人の中の1つ。真に財産を増やすことが好きな人で、一般的には富人という。格式を持つ何某のひとりが宿屋に行った際に、自分のことを大阪の貧乏人と言い、台所の手伝いをする代わりに入浴料を無料にしてほしいと頼み、宿屋はそれを了承した。この何某は根っからの経済好きのため、台所の切り回しだけでなく、食料の切り刻み方や買い入れ、魚の買い方までも秘術を尽くして世話を焼いた。その結果、台所の経費は大幅に削減され、宿屋は甚だ儲かった。数理にも長けていて、宿屋の客や近所の人たちまで何某に頼り、働き好きだった何某はこれを快く受け入れた。その結果、多くの問題を解決したくさんの人に感謝された。素町人（すちょうにん）は暇を費しただけの収入を得なければならない。ただ先方のためになることを言っただけで聞かせて教えたならば、先方にも損にならず、こちらにも損をしない。